

---

# コグニッションワールド

織宮征

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コグニッションワールド

### 【Nコード】

N6864Y

### 【作者名】

織宮征

### 【あらすじ】

天風斗希は、様々な認識能力者が在住する隔絶街の中でただ一人【超認識】を会得していない人間だった。その為か自虐的思考を持つ破目になり、春休みの前日にはいつもと変わらず自殺未遂をやらかしていた。しかし、彼はどんな手段を使っても【死ねない体】を持っていた。さらには、春休み一日目から自分の部屋の中心で浮いている女の子を発見してしまい……。

「死なせて死なせてください死なせろっつてんだろぅがよおおお  
おおおおッ！！」

夕刻、日が沈み始めた午後四時半。一人の少年の絶叫が木霊した。  
かくぜつがい  
隔絶街・第八エリアにある認識学校の屋上での出来事だった。ク  
セのあるボサボサ頭が特徴的な黒髪の少年 あまかせとき 天風斗希は、金網状  
のフェンスの前で三人の体育教師に行動を抑え付けられていた。

しかし、三人の体育教師の屈強な腕力をもつてしても、彼の行動  
は止められなかった。

「やめる天風！ たかが期末テストで赤点を取ったくらいで自殺な  
どするな！」

「……たかが？ 今『たかが』つて言ったんすか先生！？ 俺にと  
つては最重要な事なんすよ！ どうせ俺には才能なんて皆無ですよ  
二年間ずっと赤点オンリーだったでしょ！ だから死なせろつて言  
つてんだよお！！」

三人の腕力などまるでお構いなしに、斗希はブンブンと腕を振り  
回して、強引に体育教師の抑止を振り解いた。

認識学校において、斗希は『体力馬鹿』などという何ともありが  
ちで典型的なあだ名を付けられていた。しかし事実、この学校に勤  
務している体育教師の全員を集結させても、身体能力のみならば斗  
希が勝っている。『記録』されていた。

体育教師達の抑止を振り解いた斗希は、すぐさま高さ三メートル  
はある金網状のフェンスの向こう側に移動した。それも、『よじ登  
った』ではなく『飛び越えた』のだ。

フェンスの向こう側 崖に等しい場所に佇む死にたがりの少年  
は、涙目になり歯を食い縛った。

「……どうせ俺なんて、何の認識能力も開花しない落ちこぼれです  
よっ！ 学校を卒業して隔絶街の外に放り出されるくらいなら、生

まれ育った町で死んだ方がマシ」

「なら死になさいよ。落ちこぼれ」

第三者の声は突然だった。

橙色で彩られた屋上に、その細く透き通った声が響き渡る。

それと同時に、一つの弾丸じみた軌跡が三人の体育教師の側面を通り過ぎ、フェンスを貫通して斗希の頬を掠めた。

ジジツ、と斗希は右の頬に確かな熱を感じた。背中から首筋にかけて悪寒と怖気が這い上がってくる。

チラツと視線を横に向けると、金網状のフェンスには直系三十七センチほどの大穴が空いていた。綺麗な円形を象った穴の円周が轟くと燃え上がる。

「そ、総真……」

斗希は口元を引きつらせて呟いた。

体育教師達の背後には、いつの間にか右手に黒い銃を握り、超然と佇む少女がいた。ボサボサ頭の斗希とは対照的な、黒絹で出来ているかのような腰まで届く流麗な髪。身長は日本の女性の平均値よりは少し高く、百六十八センチはあるだろう。

細い眉に、目つきは鋭い……というより、いつもの事だが畏怖を覚えるほどの威圧的な眼光を放っていた。

斗希と同じクラスの女生徒　そして、隔絶街第八エリアを統括する代表生徒である総真斬葉は、斗希に向けていた黒い銃をゆっくりと下ろした。

「お、おい！　学校内において認識術コグニションスキルの行使は禁止されてうぼあ！？」

咎めの言葉を言い切る前に、体育教師の一人は斬葉にボディアツパー食らい、その巨軀が一メートルほど宙を舞った。二秒ほどして、勢いよく地面に叩きつけられる。

「では、代表生徒特権を使わせてもらいます。　少し黙っていて

もらえませんか？ 私は彼と話があるので」

苛立ったように語気を強め、彼女は言った。残った二人の体育教師は統括生徒の『特権』を使われたからか、それとも恐れを抱いたからかは定かではないが、フェンスに歩み寄る斬葉に道を開けた。

そして、斗希との距離が一メートル未満に縮まった時、斬葉は足を止める。

「な、なんだよ……。お前も俺を馬鹿にしにきやがったのか？」

顔を背けて怪訝そうに問う斗希に、斬葉はにっこりと笑った。普段そんな表情を見せないところからして、どこか無気味に思える。

「いえ、そんなんじゃないわ」

「じゃ、じゃあ何の用だよ？」

再び尋ねる斗希に、斬葉は笑顔を崩さずに、

「死にたいなら早く死ねつつてんだよこの馬鹿」

瞬間。銃口からドウンツ！ という銃声と共に赤色の閃光が炸裂した。彼女の認識能力と同調を成した銃から放たれた火炎属性の弾丸は、斗希の胸部を焼き尽くし、さらには大穴を空ける筈 だった。

「……は、はは」

超近距離での銃声と炸裂した眩く光る赤い閃光によって、意識が遠くなりそうな感覚を覚える斗希。

この隔絶街に生きる十五歳以上の人間の九十九%は、この総真斬葉のように【認識術】<sup>コグニションスキル</sup>を会得している。

隔絶街で立証、確立された心理学の実験を行い、『感性的認識』、『直観的認識』、『理性的認識』、『知性的認識』。この、人間が用いている四種の認識能力の一種類を極限まで認識させ、その身に【超認識】<sup>ハイコグニション</sup>を开花させるのだ。

彼女の極めた認識能力は感性的認識である。そして、自身の感性によるイメージを隔絶街で造形された武器と調和させ、一般的な銃ではありえない現象を引き起こす事が可能とされていた。

先刻、火炎の属性を宿した弾丸を放てたのは、彼女が脳内におい

て自身の感性による『主観的な炎』をイメージし、それを感性的認識から超認識へと切り替えたからであった。

ハイコグニッション

しかし、大穴が空く筈だった斗希の胸部 焼け焦げた学生服の下には、事実、傷一つ負っていないかった。

斬葉は緩慢な動作で銃を下ろしながら、小さく吐息を漏らした。

「これなら、その場所から墜落しても死ねないでしょうね。この隔絶街に存在する十五歳以上の人間の内、1%の認識できない人間か……。まったく、心では死にたがっていても肉体が死んでくれないなんて難儀よね。天風、あんたが死ぬ時なんて訪れないんじゃないの?」

「う、うるせえッ！ 俺は死ぬんだ！ ……こ、こ、こ、こんな高い場所から飛び降りたら死ぬに決まってるだろ！」

その場限りの強がりにも聞こえる台詞だった。

「現実逃避するのは結構。私には関係ないし、勝手にしなさい」  
そう言って、斬葉は踵を返し、斗希の前から離れ始めた。

「うおおおおおおおおおッ！！」

と、斗希は本気で飛び降りてしまった。

ドスンッ！ という重く鈍い音が、屋上の下にある校庭から聞こえた。体育教師達が大騒ぎを起こし始める。

しかし、斬葉はその行為に何の意味も無いと思い、構わず屋上を後にした。

これは、死にたがる少年が紡ぐ物語。

死ねない体を持って生まれてしまった少年の物語である。

隔絶街は埼玉県の南東、東京都との境界線付近に在り、周囲から完全に隔絶された街だ。街には八つのエリアがあり、天風斗希は全てのエリアの中でも底辺と揶揄されている第八エリアに住んでいた。

三月十四日の午前九時半。天候は穏やかな快晴。認識学校は春休みに突入した。

第八エリアの住宅街にある三階建ての集合住宅。斗希の暮らす男子寮の一階のリビングで、その会話は行われていた。

「いやー、斗希も無茶するわな！ 四階建ての校舎の屋上から飛び降りるなんて、よほどの勇気がないと実行できないぜ！」

付けっぱなし状態である大型液晶テレビの報道が聴こえないくらいの声量を持つ隣人。加治孝道は、斗希の背中をバンバンと叩きながら大笑いする。

ちなみに、報道番組では「今日も、隔絶街全域において認識世界コグニッションワールドは安定領域を維持しています」と女性キャスターが淡々とした口調で話していた。

「ごほごほお！ 孝道、飯食ってる最中に背中叩くんじゃねえ！ 危うくポテトサラダ吐き出す一歩手前だったぞ！」

「いやあ、体力馬鹿である天風斗希くんを讃えているんだよ！ ……いや、屋上から飛び降りて外傷一つ負わない時点で、体力馬鹿なんて言葉は不適切か？」

自分の発言に真剣に考え出す茶髪で長身の幼馴染。そのように楽観的な思考を走らせている彼を、斗希はキツと涙目で睨んだ。

「何で俺は死ねないんだよお……。死にたいのに死ねないなんて理不尽にも程があるだろお……。」

「いや、怒った顔してるけど、本音ダダ漏れだぞ。つっても、本当におかしな体してるよな、お前。この隔絶街の歴史に詳しい事で有

名な加治孝道くんをもつてしても、そんな体をしてるヤツを見るのはお前が初めてだよ」

孝道の言う通りだった。天風斗希という人間は、どんな方法を使っても『死ぬ事ができない』という特異を超えた、言ってしまうばおかしな体を持っていた。

昨日の飛び降り自殺の件を数に入れて、斗希がこれまで行った自殺行為の回数は、認識学校に入学して実に三十五回。

しかし、それだけの自殺行為を実行しても、彼は死ぬ事ができず、全てが未遂に終わっていた。

それに加え、この隔絶街で行われている超認識理論実験を幾度となく繰り返ししても、実験結果は全て『失敗』ミステイクに終始している。

認識学校に通う十五歳以上の人間の中で、たった一人、四種の認識能力の一つも開花できず、さらには実験の失敗に絶望して自殺という行為に逃げるのが天風斗希の日常だった。

「幼馴染の俺も今まで訊かなかったけど、両親もそんな体質してるのか？」

孝道の問いかけに、斗希は気まずげに視線を逸らした。

「……怪我は普通に負っし、至ってどこにでもいる人間だ」

この隔絶街の外で暮らしている斗希の両親は、事実、普通の人間だ。母親は料理をしている際に包丁で指を切ったところを目撃した事があるし、父親も腰を痛めて入院した事もあった。

だとしたら。

「俺、もしかして血が繋がってねーのかな……」

不意に、ポテトサラダを突いていたフォークが止まる。斗希は死んだ魚のような目をして、フォークを逆手に持ち替えた。

そして、そのままゆっくりと首元に近づけ

「おおい！？ 早まるな斗希！ つーか、その自殺行為はこれで三回目だろうが！ 今までも刺さらなかったし、血の一滴も流れなかったのを忘れたのか！」

「……ああ、そうだったな」



斗希はナイーブな心境に陥った。フォークを逆手に握ったまま、ふひひ、と唇の両端を吊り上げながら、ポテトサラダをぐちゃ、ぐちゃっと刺し続ける。はつきり言って、無気味すぎる光景だった。完全に鬱モードに入ってしまった斗希。孝道はどうしたものか、とため息を漏らしながら思考を走らせた。

「……あー、でも死ねない体だって便利な活用方法があるかもしれないぜ。もし、斗希が戦場に行ったら完全勝利は当たり前になっってくるかもな」

「……この平和なご時勢、戦場に行くことなんて無いと思うけどな」  
口だけは達者に、そう言い返す。

……でも、確かにそんな場所に行ったら、自分は誰にも負けないだろう。この第八エリアを統括する代表生徒である総真斬葉の認識術をもってしても、自分の体に微細な傷一つ負わせられなかったのだから。

「まあ、不老不死にならない事だけは祈っとくぜ。寿命が来れば死ぬると思うし、それまでは生きてるって」

軽い口調で、孝道は笑いながら言った。

しかし、寿命という言葉聞いた瞬間、斗希は顔を輝かせた。

「……そうだ。寿命があるじゃねーか！ 死期が訪れれば死ぬるんだ。……よし、早く寿命が訪れるように、俺はこれから毎日、神に祈りを捧げるようにする！」

前向きなのか後ろ向きなのか、よく分からない事を口にする斗希。しかし「うん、うん！」と、納得したかのように笑顔で頷いているところからして、おそらく前者なのだろう。

「ま、まあ頑張れ」

対して、孝道は何とも言えない複雑な感情を抱いたのだった。

朝食を食べ終わり、斗希と孝道は二階にある自室に向かっていた。

「俺はこれから町でナンパでもするつもりだけど、斗希も一緒に……

……いや、今のなし」

「……今、何を思っただけの止めなんだ？」

「いや、深い意味はねーよ。ただ、今日の斗希は鬱度が九十%を超えてると窺える。ナンパの際に鬱キャラがいても盛り上がらないだろ？」

最もな意見だが、どこか癪に障る言葉だった。しかし、今の自分には適合しているのだから言い返ししようがなかった。

斗希は一つ嘆息し、

「別にいいよ。俺は部屋で追試の勉強するし」

「おう。じゃ、また夕方な」

「りょーかい」

天風斗希は、隔絶街に生きる十五歳以上の人間の中で唯一、「クニツシヨ 認識「ケニツシヨ 術を会得していない。何度、ハイコグニツシヨ 超認識理論実験を行っても、全て失敗に終わってしまうという原因不明であり、原因の究明すら不可能な特異体質を持っている。

それは、隔絶街という心理学研究を極めた街において、初めての未知に等しい事象だった。

実験が行われる、隔絶街第一エリアの管理局 通称『塔』に所属する研究員に言わせるならば、「隔絶街始まって以来の大事事件に等しい」との事だ。

その大事件を起こした張本人である天風斗希という少年は、二年前、管理局の外壁に設置されてある大型スクリーンのニューズ速報で、顔を晒された過去があった。実験に失敗したという事実を公の場で公表させられたのだ。

そんな公衆の面前で生き恥を晒された事が災いしたのか、その日を境に、斗希は鬱患者に等しい思考回路を持つようになってしまった。

……二年前、認識学校に入学するまでは、確かに普通の人間としての思考を持っていたというのに。

しかし今となっては、自分に対する噂に脅え、認識学校の筆記試

験で赤点を取ってしまった事に恥を覚え、人生に生き甲斐すら感じられない人間性、人格へと変貌してしまった。

先ほどの、孝道の言葉で前向きな　後ろ向きでもあるが　気持ちを取り戻せたのは、彼が単純な頭をしているという一言で片づく。

加治孝道は天風斗希の親友であり、彼の抑制剤でもあった。事実、さつきまでの鬱状態はどこへやら斗希は鼻歌なんかを歌いながら「早く寿命が来ないかな」などと物騒な言葉を口走っていた。

しかし、軽い足取りで自室の前まで辿り着き、

「さて、勉強べんきよ……」

部屋の扉を開けてしまったのが、運の尽きと言えた。

理由は単純である。一気に言葉を失わせた存在が、部屋の中心で浮いていたからだ。

八畳の部屋の中心に一人の少女が仰向けの状態で浮遊していた。その体からは光り輝く粒子のようなものを散發している。

小柄な容姿なのになぜか黒色のスーツを身に纏っており、その上から太腿の位置まで届く純白のローブを羽織っていた。長い金色の髪はただ幻想的で、小さな顔立ちは精密に造形された、人形のような整合性を形作っていた。

外見から推測するに、歳は十五、十六歳といったところだろう。

金髪の少女は、瞳を閉じたまま宙に浮いている。その、神秘性を体現した彼女にいつの間にか魅入ってしまった斗希は、慌てて頭を振った。

(い、いや、人が浮くなんてありえないだろ！)

現実的に考えて、こんな現象はあってはならない。ならば、今直面している状況は夢か、幻か 現実なのだろうか、とそのような疑念が彼の心を支配する。

しかし事実、金髪の処女は部屋の中心で浮いている。

それでも、少女という存在を直視していても 普段から頻繁に現実逃避を行っている彼でも、これを現実として許容できなかった。「っーか……綺麗なな」

思わず近寄って、少女の顔を上から覗き込んでしまう。白くきめ細かい肌。細い眉は綺麗な弧を描いている。

「う……うん」

「うお！ 動いた!？」

桜色の唇が微かに歪み、少女はゆっくりと双眸を開いていく。

瞳は透き通った琥珀色だった。未だ完全に意識が覚醒していないのか、呆としたガランドウな表情だった。

「コグニション・スウェッチャブル・ト認識転移・完了」

不意に、少女は小さく呟いた。体から発生させていた神々しさを

思わせる光の粒子が除々に消失していき

「きゃんっ！」

宙に浮いていた状態から、勢いよく畳張りの床に落ちた。

「いたた……」

打った腰を右手で擦りながら、少女は涙目になる。

そして、眼前で茫然自失とした状態になっている斗希を睨みつける。

「ちょっとそこの君！ 近くにいたなら受け止めてくれなきゃ駄目じゃない！」

いきなりそんな事を言われても、斗希は未だ思考が凍結した状態で上手く言葉を発せなかった。

しかし、この少女が言葉を喋り、人間であると認識した彼は「え、えつと……悪い」と、とりあえず謝っておいた。

それにしても、人間が宙に浮けるものなのだろうか？ と再度疑問に思う。

この隔絶街の認識能力者でも、そんな芸当をできる人間はいないと思うし、認識学校の教科書でもそのような原理を学んだ覚えはなかった。

そんな思考を走らせている斗希の傍らで、少女は純白のローブに附着した埃を両手でパンパンと掃っていた。

そのまま、少女はきよろきよろと周囲を見渡した。一時の間、それを続けた後、

「あれ……？」

と、可愛らしく小首を傾げた。

「ここ、どこ？」

「は？」

少女の思ってもいなかった言葉に、斗希は呆けたような声を漏らした。

「あれ？ 第一エリアの管理局に転移した筈だったのに……なんで私、こんな汚い部屋にいるの？」

ピキツ！ と斗希のこめかみに小さな青筋が浮いた。

確かに、掃除も口クにしないし漫画やゲームソフトが床に散乱しているし、昨日読み漁ったHな雑誌もベッドの下から少しだけ覗かせている。

しかし、勝手に人の部屋に上がり込んでいた不法侵入者が口にできる言葉では断じてない。

「おいおい、いきなり人の部屋に入ってたクセに汚い部屋とはなんだ？」

「それより、ここはどこなの？」

斗希の言葉を無視して、逆に問い返す少女。

「……俺の部屋だよ」

斗希はボサボサ頭を掻きながら面倒臭げに、しかしこの上なく簡潔に答えた。

「君の部屋？」

「そうだよ。というか、お前誰だよ。それにその格好、どっかの民族衣装か？」

「む、いきなり失礼なこと言うんだね、君。これは民族衣装なんかじゃなくて、れっきとした礼装だよ」

「人の部屋に勝手に上がり込んだ拳句、汚い部屋とか言ったヤツが失礼なんて言葉使うな！」

斗希は声を荒げて叫んだ。

(……なんかもう、色々面倒臭くなってきたな)

はあ、と重いたため息を漏らし、斗希は少女の細い腕を掴んだ。

「きゃっ！ い、いきなりなに!？」

「このエリアの警察に連れていきます。不法侵入は犯罪だからな」  
斗希は強引に腕を引っ張って歩き出そうとするが、少女も腕をバツつかせて振り解き、慌てて斗希との距離を取った。

「……おい、いい加減にしてくれ。こっちは追試の勉強しなきゃいけないんだ。お前の相手をしてる暇なんて無いんだよ」

「じゃあ、第一エリアの管理局まで連れてってくれないかな？ そ

うしてくれれば助かるんだけど」

「だ・か・ら！ そんな事してる時間は無いんだって！」

ガシガシ！ と苛立ってボサボサ頭を掻き毟る斗希。

「……もし、今度の追試で赤点取ったりしたら」

しかし、不意にその動作がピタリと止まった。

その末路を想像してしまった彼は、おぼつかない足取りで机の上に置いてある筆箱の中からカッターナイフを取り出した。

「……十数分も時間を無駄にしちまった。これじゃあ追試は終わったも同然だな。は、はは……」

朝食時と同じく、斗希は生気が無いに等しい死んだ目つきになる。カチカチとカッターナイフの刃を躡わにし、首元に近づけ

「ちょ、ちよっと、何してるの!？」

いきなりすぎる展開に、少女は動揺を隠せずに言うが、斗希は黙れ！ と声を荒げた。

「十数分の学習時間は無駄になったんだ！ こんな事態になった以上、死んだ方がマシだッ！」

そうして、斗希は涙目のまま実行に移した。

カッターナイフの切っ先で、勢いよく首の頸動脈を切りつける。

少女は堪らず目を瞑った。

しかし、そんな行爲を行っても、結果は今まで同一だった。

「え……?」

恐る恐る、強く瞑っていた瞳を開いた少女は、その光景に愕然とし、その現実に驚愕した。

少女はすぐさま硬直したまま動かない斗希に歩み寄って、首元を凝視する。

「き、傷一つ負ってない……?」

呆然と大きく口を開く少女。そんな彼女を他所に、斗希の体がプルプルと小刻みに震え出す。

そして、その二秒後。

「があああああああああああああああああッ！！」

「きゃあっ！？」

獣の咆哮にも近似している斗希の絶叫を超近距離で聞いた少女は、鼓膜を強く圧迫された。

少女は両耳を押さえながら三步後退する。斗希はカッターナイフを部屋の隅に投げ捨て、感情のままに叫ぶ。

「何で、何で俺は死ねないんだ！ 首の頸動脈を切ったら普通死ぬだろ！？ って事は、俺は普通の人間じゃないって事か！ 普通の範疇に収まらない異常者ってわけですか！！ クソツたれええええええええええ！！」

苦惱、苦悶、悲痛、全ての負の感情を吐き出すかのように、斗希は叫ぶ。

しかし、

「もう嫌だ！ もう駄目だ！ もう死にたいいいいいッ！」  
どれだけ吐き出しても、さらに負の感情が彼の心を埋め尽くしていく。

壁に額を打ち続ける斗希。先ほどまで若干引いていた少女は、「や、止めてよ！」と、彼の片腕を掴んで壁から遠ざけた。

そうして、目尻に涙を溜めながら少女は言った。

「どうして首から血が流れないのか知らないけど、自分から死にたいなんて口にしたら駄目だよ！ 世の中には死にたくもないのに理不尽な運命で死んじゃう人だっているんだから！」

少女はただ真剣だった。純粹に、斗希を想って叱咤していた。

「死んじやったら、君を産んでくれた両親や友達がどれだけ悲しむか解ってるの！？ 君は死んで楽になるかもしれないけど、生きている人達の記憶に、君が死んだっていう事実が刻み込まれるんだよ！ 死を軽視しないで！ 死ぬって事は、君だけが全てを失うんじゃないの！ 君を大切に想っている人も、君を失うって事なんだから！」



畳み掛ける少女の言葉に、いつしか斗希は言葉を失っていた。何も返答できなくなっていた。

それは、そんな事を言われたのは初めてだったからか。

それは、少女の言葉が正しいと思ったからか。

それとも、言い返す言葉が見当たらないからか。

「……だから、死にたいなんて言わないで」

ポロポロと、終には少女の頬に大粒の涙が伝った。

……なぜ、赤の他人の為に泣けるのだろう。

なぜ、出逢ってから二十分も経っていない人間の為に泣けるのだろう。

それは、今の天風斗希には理解できなかった。

「い、ごめん……」

だから、目を背けて小声でそう返す事しかできなかった。

天風斗希は極度の自虐的思考を持つ人間だ。少々の弾みで自殺行為をやらかすのは日常茶飯事と言っても過言ではない。

それは、不幸や不運に見舞われた時のみならず、『幸運』に恵まれた時ですら、先ほどのような突発的な行動を起こしてしまうのだから救いようがなかった。

以前、宝くじを購入した際、四等賞の一万円に当選した事があった。傍らにいて孝道は口笛を吹きながら、

「これで今年の運は使い果たしたな！」

と、冗談交じりに斗希の幸運を賞賛した。

しかし、その言葉が引き鉄となったのか、斗希は近傍にあった高さメートルはある橋の上に駆け寄り、こっ叫んだ。

「今年の運を使い果たしたくらいなら、死んだ方がマシああああああああッ！！」

そして、大泣きしながら下の川にダイブをやらかしたのだ。

それ程までに、天風斗希という人間の心は負の感情で構成されている。

そして今現在。対面している黒色のスーツの上に純白のローブといった、何とも不審でおかしな格好をした金髪の少女に正座をさせられ、窘められていた。

「あのね、一万円が当たったなら素直に喜ぶ。それだけの感情を抱けば良いんだよ。そのお友達の言動が悪いとは言わないけど、もっとちゃんとした自制心を持たなきゃ」

「……はい」

「それにね、無闇やたらと刃物に手を出すのも駄目。刃物ってというのは、使い道を誤れば、すぐに人を殺せる凶器になるんだから」

「……そうですね。……なぜ俺には効かないみたいですね」

「うん？ 何か言った？」

ギラツとした鋭い目つきで睨みつけられた。

「いや、何でもありません……」

と、斗希は消えそうな声で返答する。

そして、不意に立ち上がった少女は、部屋の隅に転がっているカッターナイフを手に取り、スーツの内ポケットに仕舞った。

「ああ、何すんだよ！ それがないと」

「それがないと、なに？」

「いえ、何でもありません」

少女の威圧的な眼光にあっさりと敗北した斗希は、即座に言い直した。

「はあ……」

少女は嘆息した。何かもう、精神的に疲れきっているような表情だ。

「まったく。やっと隔絶街に来れたのに初っ端から人に説教する破目になるなんて。さらには自殺行為を目の前で見せられるなんて幸先が悪すぎるよ」

「え？ お前、隔絶街の人間じゃないのか？」

「うん。私、イギリスの片田舎から来たから。一時間前に出発して、第一エリアの管理局に到着する筈だったんだけど……なんで君の部屋に着いちゃったんだろ？」

うーん、と小首を傾げる少女。

斗希も「はい……？」と同じく首を傾げた。

「おい、イギリスなんて遠い国から日本に一時間で着くわけがないだろ。飛行機を使ったって無理だぞ」

「飛行機なんて使わないよ。あんな鉄の塊が空を飛ぶわけがないじゃない」

「いや、その理屈もおかしいけど……じゃあ、どうやって隔絶街に来たんだ？」

コグニッションスクリード  
「認識転移したんだよ」

何とも自然な口調で言い放つ少女。

「……認識転移？」

斗希の脳内に？マークが浮かぶ。そんな言葉を聞いた事がなかったが故の反応だった。

「あれ？ 「コグニションスベリード」 認識転移を知らないの？ 隔絶街では一般的な技術理論だと思つてただけだ」

そんな事を言われても、斗希はそのような単語を耳にした事はなかった。認識学校でも、学習するのはもっぱら超認識「ハイコグニション」についてだけだ。

とは言つても、二年生である自分がまだ授業で習っていないという可能性も考えられる。

「俺はまだ習つてないぞ」

と、頭の中でそう結論付けた通りの答え方をした。

「そうなんだ。あ、そういえば自己紹介がまだだったね」

と、ふと思いつ出したかのように両手を叩き、につこりと笑う少女。

「私はリアルカ・ミリエル。長いからリアルでいいよ。服装を見て解ると思うけど、見ての通り聖帝会「せいていかい」の系統認識者「けいとうにんしきしゃ」だよ」

「系統認識者つて、なんだ？」

「……もしかして、さつきから解らないフリしてる？」

「ぶくー」と純白の頬を丸く膨らませる少女。リル。どうやら、

斗希の素朴な言動がからかわれているものだど解釈したらしい。

「認識転移も知らないつて言つたし、もしかして君、隔絶街に住み始めたばかりなの？」

「いや、俺は生まれも育ちもこの隔絶街だぞ。両親は外界で暮らしてるけど」

「生まれた時から隔絶街に住んでるなら、系統認識者の存在を知らない訳がないよ！ 世界的にも有名で讃えられてるんだよ、系統認識者は！」

「いや、本当に知らないんだつて。大体この隔絶街には、十五歳未満の子供を除いて認識能力者しか住んでないぞ」

「……認識能力者？」

今度は、リルの頭の上に？マークが浮かんだ。

「なにそれ？ 系統認識者から派生した種族の名称？」

今度は逆に、リルが疑問を尋ねてきた。どこか会話に齟齬が生まれている気がするが、斗希は特に気にかげず問いに応じた。

「認識能力者つてのは、直観的認識、感性的認識、理性的認識、知性的認識の一種を極限まで高めて、超認識を会得した人間の事だよ」  
ハイコグニッション

「超、認識？」

訝しげに言葉を繰り返すリルに、斗希は「そうそう」と、深く頷いた。

「でも、この四種の認識能力は、人間个体じゃあどうあがいても極められないって言われてた。だけど、それは過去の俗説になったな。それを覆したのが、心理学を駆使した科学実験、超認識理論実験だ。ハイコグニッション簡単に言えば、隔絶街における最先端の科学技術を応用して、常人の持つ認識能力を超えた超認識を体に施すんだ」

人間は、外界から情報を知性として意識する。そして、それを様々な意味づけとして過程を通し、認識という概念を取得する。

様々な認識を行う上では、五感が筆頭に挙げられる。そして、一番効率的かつ有効的な人体部位である耳と眼球、この二つの感覚器に超認識理論を成功させるために造られた科学機器で『一方的な認識』を施すのだ。

眼球には認識電波、耳には認識音波を流し、体に100%の調和を成させる。

実験の際に痛覚、または体に異常が生じないというのも、既にこの隔絶街で立証された事実である。

十五歳になった子供は、この超認識理論実験に参加し、四種の認識能力いずれかを超認識へと向上させる。そして、後に自身の認識能力の本質を学ぶために認識学校に入学するのだ。

斗希から一通りの話を黙って聞いていたリルは、「ほえー」と驚いたような声を漏らした。

「そんな技術理論が開発されてたんだ。勉強不足だったかも。それ

で、君 えっと……」

「斗希だ。天風斗希」

「トキは、どんな認識能力を持つてるの？」

ぐはぁッ！ と、銃で心臓を撃ち抜かれたように大袈裟なジェスチャーをする斗希。

今まで安定状態を保っていた気分が、一気に負の感情で埋め尽くされていく。

「は、はは……。言っちゃえば、俺だけなんだよ……」

「え、なにが？」

「この隔絶街の十五歳以上の人間で何の認識もしてないのは俺だけなんだよおおおおおッ！！」

瞬時に立ち上がり、またもや壁にガンガン！ と頭を叩きつける

斗希。それでも、結局痛覚すら感じなかった。

「はぁ、はぁ……。俺なんて、何の認識能力も開花しない落ちこぼれさ。普通なら実験が終わると認識できてる筈なのに、何度再実験しても、認識学校で二年間も知識を学んでも認識できない愚かで哀れな人間なのさ……」

ふひひ、と斗希は口元を吊り上げて無気味な笑い声を発する。誰がどう見ても不審すぎる人物だ。

「え、えっと……」

リルは目を泳がせながら、次の言葉を慎重に選んでいるようだ。

しかし、その間に斗希は胡坐で座りなおし、乱れた呼吸を整えて会話を再開させた。

「で、話を戻すけど、四種の認識能力のいずれかを極限まで向上させて、超認識ハイコグニッションを会得した人間を認識能力者チカラと呼ぶ。そして、認識能力者になった人間は、その認識能力を基盤として、認識術コグニッションスキルを行使する事が可能になるんだ」

「認識術コグニッションスキルって？」

「……まあ、俺は認識した立場の人間じゃないから教科書通りの答え方しかできないんだけどさ。簡単に言えば、自身の認識能力に則って、かつその人間の認識能力の根源的な力を最大限に発揮した事象を実現可能に出来る技だ。例えば、その人間の認識能力が『知性的認識』の類だとする。そこから導き出せる認識術は……っと、少し待ってろ」

斗希は机の上の本棚から一冊の教科書を抜き出し、ページを捲り始める。表紙には【認識による実行理論】と表記されていた。

「えつとだな。……知性的認識を超認識ハイコグニッションへと昇華させた人間は、『思考力』、『知力』、『知性』、『心理] に対しての欲求』が飛躍的に上昇する。認識術の例として、一瞬においての疑問の解決、脳を意識的に活性化させる事が可能。……って感じだな」

教科書に目を走らせながら音読したときは、再度腰を上げて、教科書を本棚に戻した。

「まあ、極論で言えば人間個体で到達できない認識能力の獲得ってわけだ」

さらに言えば、第一エリアの管理局 塔に所属する人間や、隔絶街に存在する十のエリアの代表生徒は『戦闘特化』の認識術コグニッションスキルを会得している。昨日の夕方、斗希が自殺しようとした際に現れた総真斬葉がその類に属する。

斗希は一通りの説明を終えるが、リルはどこか納得がいかないような表情をした。

「うーん……科学機器による一方的な認識か。初めて聞いたけど、隔絶街って結構非人道的な実験をしてるんだね」

「いや、非人道的って……」

「人間が持つ認識能力は、その人間が自由な認識を得る為に与えられたものだよ。その実験を行うと、確かに人間個体では辿り着く事ができない領域に達成できる。でもね、私達人間が不特定の何かを認識するのは私達だけの自由であって、私達だけに権利があるんだよ。認識能力が極限まで上昇するっていうのは、一種の禁忌だと私

は思う。だって、それは自己の持つ『自由な認識の権利』を剥奪されてしまう事と同一だもん」

「いや……まあ、確かにそうかもしれないけどよ」

「でも、そう考えると、トキは幸せだと思うよ。固定された認識に従わずに、自由な認識を得る事ができるんだから」

そう言っただけでリルは微笑んだ。それは、心の底から自分を『幸せ』だと想ってくれているような純心で無垢な笑顔だった。

「それに、認識能力が向上しなくても、トキは凄いい体を持つてるじゃない」

「……この、死ねない体の事か？」

うん、とリルは頷く。

「人間はね、誰だっていつか訪れる『死』を恐れると私は思うの。黄泉の国や地獄に逝くのが怖いんだよ。うん、私だって、きつとそう」

どこか憂いを帯びたような笑みを浮かべ、リルは静かにそう言った。

「じゃあ、そろそろ行くね。何でトキの部屋に認識転移「クニツシヨンスヒード」しちゃったのか分からないけど、これも運命だって思っておくよ」

不意に立ち上がったリルは、静かな足取りで玄関へと進んでいく。

「お、おいリル！」

しかし、立ち去っていくリルを、斗希は反射的に呼び止めてしまった。

「どうしたの？」

リルは振り返って小首を傾げる。

斗希は、自分で呼び止めておきながら何を言葉にすれば良いのかわよく分からなかった。

(でも、これくらいは口にしとくべきなんだろうな……)

そう心を固めた斗希は、人差し指で頬をポリポリと掻きながら、

「えっと……あ、ありがとな。さっきの、気遣って言ってくれたんだろ？」



自分だけの錯覚かもしれない。  
自分の思い違いかもしれない。  
だけど、言葉にしたかった。

彼女の言葉で、少し救われた気がしたから。  
恥ずかしげに目を逸らしている斗希を見据えるリルは、にっこりと笑って、

「当たり前だよ。自分から死にたいなんて口走ってる人を放っておくほど、私は非情な人格をしていないからね」

「じゃあ縁があつたらまた会おうね」と、そう言い残したリルは玄関の向こう側へと消えた。

そうして、先ほどまでの馬鹿みたいな騒ぎが、まるで嘘のように静まり返る。

「  
斗希は名残惜しそうに、ずっと玄関を見つめていた。  
「凄い体、か……」

その事をやっと認識したかのように、リルの言っていた言葉を繰り返した。

でも、こんな体を持っていても、どうなるものではない。  
使い道がなければ、それは無意味で、無価値な力なのだ。  
斗希は思い出す。

(……昔は、よくヒーローモノのアニメを見て誰かを守る強い男になりたいって思ってたんだよな)

そう。本当に、そんな子供の憧れる典型的な思考を持っていたのだ。

しかし、今となっては、死にたがりの人間という体たらくだ。  
それでも、リルは自分の心を少し癒してくれた気がした。

「……久しぶりに、行ってみるか」

こんな気分では、おそらく勉強も捗らないだろう。深くため息を吐きながらそう結論付けた斗希は、部屋の押入れの奥深くに収納していた道着を取り出して、町へと出かけることにした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6864y/>

---

コグニッションワールド

2011年11月20日20時04分発行